

「吃父母・吃外面」などについて

～構造の「一致性」と語順の「類推性」（不一致性）～

朱 廣 興

一. 定着している中国語の品詞論

中国語の語順（Word Order）について、大河内康憲は次のように説明している。

「主語や述語にかかわる中国語のシンタクスの基本は「S・V（Adj）」や「S・V・O」である。たとえば、

他来。（他：かれ 来：来る）

他学中文。（他：かれ 学：学ぶ 中文：中国語）

のようになる。この順序が重要である。主格、対格といったものが語形にあらわれないから、ある名詞が述語動詞に対して主格の関係にたつか、対格となるかはまったく単語のならば順序によって示される。語順はほぼ英語とひとしく、述語動詞の前に主語、後に目的語ということになる。」（「日中対照文法論—主語及びそれとかかわる問題」四七ページ『日本語と日本語教育—文法編』・文化庁・一九七三年）

品詞によって中国語の文の語順を説明しようとするのはもちろん大河内の説に端を発したものではない。言語学者、馬建忠が西洋文法を模倣し、その品詞論を中国語文法に導入したのがきっかけのようで、その後、この品詞論が修正されながら受け継がれ、現在中国語文法体系の一環とされ、定着しつつあると言っても

よい。

例えば、「漢語的詞類在形式上無從分辨。但是要討論文法就非把詞分類不可」(呂淑湘 『中国文法要略』 十六ページ一九七五 文史哲出版社)といわれている。香坂順一も「このようにして品詞を分ければ……、極端なばあいには中国語の単語には品詞はないという、およそ非常識な結論になることはないのである。」と、中国語の無品詞論を批判している。また、「現在のところ中国ではこのような考え方(すなわち有品詞論)が優勢をしめている。」(『中国語学新辞典』 五六ページ「詞類」の項・中国語学研究会編 一九八七年光生館)

つまり、中国語研究においては中国語には品詞があるし、またそこから中国語の研究を始めなくてはならないと思われる。

なぜ品詞分類が必要なのか、すなわち品詞はどんな文法的な意味を持っているのかについて、香坂順一は次のように説明している。

「単語もこのように用途によって、性質によって分類しておいた方が便利である。単語を一定の類によってわけると、この分類整理が品詞という名でよばれる単語の区分である。したがって、品詞論というものは、文構成というものを前提として行なわれるべきものであって、品詞論そのものが独立しているものではない。」(『中国語学の基礎知識』二六四ページ)

中国語学新辞典にもそれと似たような説明が見られる。

「そもそも品詞分類は分類のための分類ではなく、他の目的のための手段であり、手段の上下は合目的性によってきまる。品詞分類の目的とは統辞論段階での文の構造分析を簡潔に行うことである。品詞は、統辞論段階の単位として使用されるのであるから、文法体系としては、統辞論記述の前に品詞分類があるはずである。」(同上 五七ページ)

つまり、品詞論の存在が「品詞→文の構造(統辞論)」ということをも可能にするとして、文法体系において中国語も英語などとはかわりはないと主張されている。

しかし、中国語にも品詞論があると認められながら、中国語の語順関係について

「上述のごとく主語はときに施事であり、ときに受事であり、ときに施・受事のいずれでもなく、さらに賓語も施事であったりするから、主語と賓語、施事と受事の間には必然的な関係はない。」（『中国語学新辞典』 四三ページ）

また「中国語文法では主語・賓語がしばしば問題となった……」（『中国語学新辞典』四六ページ）といわれているのも実情である。

だとすれば、中国語にも「品詞」があるとされているにもかかわらず、中国語の語順における「WORD」と「WORD」との関係が非常に不安定で「品詞」によって制限されていないと言わざるを得ない。となると、中国語の語順を説明するためであるという考えに基づいて分類された中国語の品詞といわれるものが実際の語順分析において、その役割を果たしているのであろうか。端的に言えば、中国語における語と語との関係、すなわち語順（WORD ORDER）現行の品詞論によって説明されているのであろうかと疑われる。小論では中国語の動詞と名詞（便宜のため、小論でも「V・N」を使わせてもらう）と言われる中国語の「V N」語順を日本語の「NをV」構造と比較しながら中国語における品詞論の妥当性について検討するし、中国語の「語順」と日本語の「構造」というものの違いを明らかにしたい。

二. 構造における語関係の一致性

「品詞論というのは文構成というものを前提として行われるべきものであって、品詞論そのものが独立しているものではない。」（中国語学の基礎知識 264ページ）

だとすれば、構造における語と語との関係はお互いの品詞によって説明することができるはずだということになる。

まず、具体的な例で動詞と名詞との関係を考えてみよう。同じ動詞が違う名詞を相手にする場合、動詞とそれぞれの名詞との関係は一致するのか、それとも名

詞の「意味」によって左右されるのか、まず、日本語の「NをV」という構造における「N・V」両者の関係は名詞の変換によって変わるかどうかについて考察してみたい。

例えば「～を食べる」という構造の「～」の部分に違う名詞を入れて、そして「食べる」という動詞との関係を観察する。実は、「御飯や魚や肉や果物」を入れても、動詞「食べる」と同じ関係を保つことができるとはっきりとわかる。つまり、

「御飯」を食べる。

「魚」を食べる。

「肉」を食べる。

「果物」を食べる。

などの文における「名詞」はいずれも動詞「食べる」の「目的語」であるから、動詞と同じ関係になるというわけである。

では、「薬」という名詞に換えたらどうなるのであろうか。「薬」は飲むべきもので、食べるものではないという日本人の認識から、「薬を食べる」という文全体によって表された「意味」は常識において正しくないかもしれないが、動詞「食べる」との関係は上記の例文とまったく変わりはない。

「レストラン・食堂を食べる」のように、「場所」という意味を表す名詞を入れても、ゴジラは「レストラン・食堂」を食べたというような常識外れの怪物映画でない限り、一般的な常識では、考えられない内容であると言えようが、動詞の「食べる」にとって同じく「目的語」であることに変わりはない。語と語との関係が上記のものとまったく同じだから、常識外れの内容になるだけである。言い換えれば、名詞の「意味」によって動詞「食べる」との関係を考えることはないということである。

「道具」という「意味」を表す名詞「茶わん・コップ」を入れて「茶わん・コップを食べる」という文にしても同じ結果が見られる。

また食べるという動詞を「読む」に換えて名詞との関係を考えてみよう。

「本・雑誌、新聞」を読むという文における名詞はやはりいずれも動詞「読む」の「目的語」となる。「場所」という意味を表す名詞「大学・高校・中学校・小学校ないし幼稚園」を入れて、「大学・高校……」を読むという文にしても文全体によっ表される意味は通じないかもしれないが、名詞自体はやはり「読む」という動詞にとって「目的語」であることにはかわりはない。けっして「意味」によって「構造」が変わるということはない。

上記の事実をまとめてみると、同じ構造における名詞と動詞との関係は確かに品詞によって決まるという関係の「一致性」が伺える。相手になる名詞自身がどんな意味であろうと語と語との関係（構造）においてまったく考慮されていないことがはっきりとわかる。

意味を考慮せずに品詞だけで動詞と名詞、すなわち「語」と「語」との関係が決まるという関係の「一致性」から、日本語における品詞論がそれなりの文法的な役割を果たしていると言える。端的に言えば品詞分類本来の目的に合致しているということである。

構造における語関係が品詞によって決まるという語関係の一致性によって文全体の意味の理解につながっていくと言えよう。

中国語の語順における「語」と「語」との関係も品詞によって決まるという「一致性」があるかどうかについて次の具体的な例で考察してみたい。

三、語順に見られない語関係の一致性

まず「吹風考」における杉村博文の説明を見てみよう。

「（吹風）（西太陽）のような語彙的、あるいは慣用語的色彩の強い表現について、その構成要素間の関係を意味論的に細かく詮索することがそもそも無意味であるという非難もまた甘んじてうけねばならないだろう。」（『日本語と中国

つまり、中国語の語順における語と語との関係を考えると、その「語」自身が持っている「意味」を考慮に入れてはいけないとわかっていても、それをぬきにしては、論じられない場合もあると言いたかろう。もっと沢山の例文を見てみよう。ひとつ断っておきたいのは例文に付いている訳文はただその大体の意味を示すための便宜的なものにすぎないということである。

A: 「吹」の場合

V N

1. 吹 笛子 (簫・口琴・楽器)。
笛 (ハモニカ・楽器) を吹く。
2. 吹 風 (電風扇・冷氣・暖気・海風)。

B: 「吃」の場合

1. 吃 飯 (麵・水果・東西)。
御飯 (そば・果物・もの) を食べる。
2. 吃 公司 (家裏・父母・老板)。
会社などを食べるのではなく、会社……は食べさせてくれるという意味である。
3. 吃 大碗 (中碗・小碗)。
大盤 (中盤・小盤)。
大盛り (中盛り……) を食べる。
4. 吃 食堂。
食堂で食べる。

C: 「讀」の場合

1. 讀 書・報紙・雜誌
本 (新聞・雜誌) を読む。
2. 讀 大学 (高中・初中・小学・幼稚園)

大学（高校・中学・小学校・幼稚園）に行っている。

D：「洗」の場合

1. 洗 衣服。 衣服を洗う。
2. 洗 涼水。 冷たい風呂がいい。

E：「打」の場合

1. 打 人。 人を殴る。
打 中鋒。 センターという攻撃（防衛）位置をつとめる。

F：「晒」の場合

1. 晒 棉被。 布団をほす。
晒 太陽。 ひなたぼっこをする。

G：「坐」の場合

1. 坐 椅子。 椅子に座る。
2. （台上）坐着 主席団 主席団が台上に座っている。

H：「去」の場合

1. 去 学校。 学校に行く。
2. 去 皮。 皮を剥く。

I：「烤」の場合

1. 烤 玉米。 とうもろこしを焼く。
2. 烤 火。 火にあたっている。

J：「出」の場合

1. 出 事。 事故がおきる。
2. 出 銭。 金を出す。
3. 出 門。 家を出る。

K：「下」の場合

1. 下 山。 山から降りる。
2. 下 麵。 そばを入れる。

などのような例は本当に枚挙に暇がないほど数多く存在しているのである。

上記すべての例文から、同じ動詞と言われるものなのに、違う名詞と言われるものが相手になると語順における「N」と「V」との関係も変わっていくという事実に気がついたのであろう。つまり、中国語にも品詞論があるといわれながら、実は語順における語関係は品詞ではなく、まったく名詞といわれる単語の意味によって左右されているということになる。

前に述べた杉村博文の説明と同じように、「吃飯」・「吃大碗」・「洗衣服」・「洗凉水」などの語順について、大河内康憲も次のように説明している。

「〈吃飯〉は〈めしをたべる〉ことであり、〈洗衣服〉は〈衣服をあらう〉ことで、対格目的語であるが、次はいわば「食べ」、「洗う」ための道具である。……構造的には「吃飯」と「吃大碗」はかわりなく、目的語になる個々の単語の意味的な差がもたらすものといわなければならないだろうか。（『日本語と日本語教育』一文法編一五一ページ・昭和六十年 文化庁）

同じ例文に対して、中国語語学新辞典でも「洗衣服」の衣服を対象、「洗凉水」の凉水、「吃大碗」の大碗を道具と説明されている。（同上 四六ページ）

このように、名詞といわれる単語の意味の差が品詞にかわって語順における語と語との関係を左右する事実を認めている。

大河内は、「大碗」「凉水」だから、道具であるという極めて単純な推理で「吃」「洗」の目的語でないと判断しているのであろう。言わば、「大碗」や「凉水」が目的語でなく、道具であると理解されたのは、品詞によるものではなく、単に語彙の意味から判断された結果である。品詞が頼りにならないから個人のかんを働かせて推測せざるを得ないという事情が伺える。

さて、「凉水」・「大碗」が道具であると理解されているが、それでは果たして「茶わんで食べる」ことを「我吃碗」、「水で洗う」ことを「我洗水」と言うのであろうか。言うはずがなかろう。またこの結論の延長線で考えると、「我吃筷子（盤子）」〈私はお箸（お皿）を食べる〉、「我洗手（刷子）」〈私は手

（ブラッシュ）を洗う」の「手・刷子」も道具として理解されなくてはならなからう。

風呂の湯加減を聞かれた時、返事する「我洗冷水」は、「冷たいお風呂がいい」ということであり、「冷たい水でなにかを洗う」ということではない。

ラーメン屋で店のご主人に注文を言う「我吃大碗」は、「私は大盛りを食べる」ということであり、「大きな碗で食べる」という意味ではない。場面と合わせて考えると簡単に理解してもらえるものだと言えよう。

品詞のかわりに、名詞といわれる単語の意味が語順における語と語との関係を判断するてがかりになるから、外国のかたにとって把握しにくいのは無理もないことであろう。

「動詞」が同じであっても、相手の「名詞」の意味によって両者の関係がかわるから、日本語のように、語と語との関係が品詞によって決まるという関係の「一致性」が見られないのも当然のことである。この「一致性」がないから、品詞論は語と語との関係を説明するために行われるものだという文法観からみると、中国語における品詞論はやはり不必要なものであると言わざるを得なからう。

品詞によって語関係が決まるという一致性を無理やりに中国語の語順関係に適用しようとするから矛盾が生じたわけである。中国語の「吃」など他動詞と決め付けられても、他の語と同じ関係を保つことができないから「存現文」のような分類で多くの「例外」を片付けなくてはならない矛盾が生じる。

語順における語関係には「一致性」がないとすれば、どのようにして名詞と言われる単語の意味をてがかりにして表されようとする意味を正しく判断するのか次の問題になる。

四. 中国語の語順における語関係の類推性（不一致性）

前に述べたように、中国語の語順における語関係は品詞によって決まるものでないなら、どのようにして名詞の意味をてがかりにして判断したらいいのか。ここではもう一度「我洗冷水」「我吃大碗」を取り上げて考えてみよう。

「我洗冷水」という文の重点は「冷水」の「水」でなく、「冷」にあるのであろう。つまりこの「冷水」は単なる「風呂」の水温の違いを区別するものであって、道具を意味するものではない。これがわかったら、「風呂」のことだから、類によって推測していくと、「我洗温水」（ぬるい風呂がいい）も「我洗熱水」（熱い風呂がいい）も「我洗温泉」も分かってくるのであろう。また「我洗衣服」は「私は衣服を洗う」であるという関係がわかったら、類によって推測していくと、「洗えるもの、洗ってもいいもの」例えば「手・ズボン」を入れると「我洗手」（私は手を洗う）、「我洗毛巾」（私はタオルを洗う）を理解することもできるし、理論的に自ら正しい文を無限に作ることもできよう。

まとめてみると次のようである。

冷水	
凉水	
洗 温水	（「風呂に入るかシャワーを浴びる」類型、冷・涼・温・熱な
熱水	どは湯加減のこと）
温泉	
洗 手	
脚	
衣服	（「何かを洗う」類型、手・毛巾・衣服・車・碗などは洗える対象）
車	
碗	

他についても同じことが言える。

「我吃大碗」の「大碗」も「冷水」と同じく、「大碗」の大に重点がある。それは「碗」という容器を使う食べものの「量」の違いを区別するものであり、道具の意味を表しているものではない。だから、また類によって推測していくと「吃中碗」も「吃小碗」も分かるようになるし、自分も応用できるようになるのであろう。これだけでなく、飲み物もよく「瓶やコップ」という容器を使って量の違いを区別されるから、「喝大瓶」「喝中瓶」「小瓶」や「喝大杯」「喝中杯」「喝小杯」をなんなく理解することができよう。ビーフンややきそばならよくお皿で量の違いを区別されるから、「吃大盤」「吃中盤」「吃小盤」もこの類のものになる。「我吃飯」は「私は御飯を食べる」であるとわかったら、食べ物を入れると、すべて同じ関係で理解することができる。例えば「吃水菓」「吃盤子」がそうである。「吃老板」は「社長が食事を提供してくれる」とわかったら、「吃父母」・「吃兄弟」・「吃公家」についても推測できるのであろう。

中国語をどう理解したらいいかについてスウェーデンの言語学者、カールグレンの説明には興味深いものがある。

「這須要一種揣測的工夫、或者毋寧說是必需對中國人如何造句、如何用話表現他們頗有體驗。必需要瞭解中國人的心靈：讀書、反復的讀、讀到能使自己習慣於中國人的想法、直到能自動像中國人一樣的思想。」（『中国語之性質及其歷史』六一ページ・国立編譯館中華叢書編審委員会・一九七八年）

上記の事実を裏づけるような説明であらう。

大河内は「洗冷水」や「吃大碗」のような用例のいずれかがわかったならば、勝手に推測する必要もなくなるのであろう。ただし品詞に頼らずに、「意味」によって語順における語関係を推測しようとするのは、中国語にも品詞があると主張している大河内にしては非常に不調和な感じがするものである。

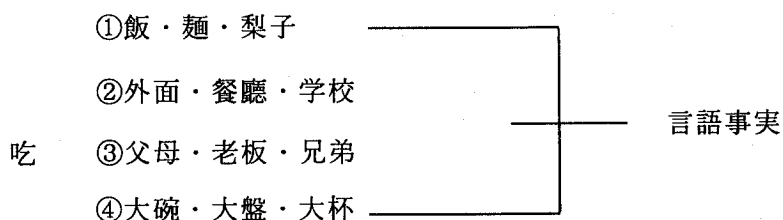
すでに述べてきたように、「VN」という中国語の語順における語関係はまったく「N」といわれるものの「意味」にかかわっていることがはっきりと分かる。

同類のものからひとつわかれば、あとはそれによって類推していけばいいということになる。というわけで「V」と言われるものが同じであっても、そのいずれかの意味関係を基準にして、全てを一致化してはならないということになる。つまり、「吹笛子」（笛を吹く）の笛は「吹かれるもの」であるから、同類の（簫・ラッパ・楽器）等を入れると当然同じ意味関係となるが、こんな意味関係を「吹電風扇」（扇風機にあたる）にあてはめてはいけないということである。「扇風機は「吹くもの」であるから、「冷氣」（冷房）・「暖氣」（暖房）「風」（風）などとは同類の物となる。つまり、吹「電扇」と吹「冷氣・暖氣・風」とは全く同じ意味関係となるわけである。

中国語の「VN」と言われる語順における語関係は「N」の意味違いによって類推しなくてはならないから、「類推性」の語関係であると言いたい。これは明らかに日本語の「NをV」構造における「一致性」の語関係とは完全に違うものである。

まとめ

「品詞」で説明できないものを「慣用句」とで片付けたらどうかについて、「吃」を例にして考えてみたい。



上記のように、「吃」に関して、意味によって考えると少なくとも四種類の語関係が存在している。

言語事実からもっと普遍的な法則を求めるのが文法研究の目的なら、①以外のものをすべて「慣用句」としなくてはならない根拠はいったいどこにあるのだろうか。

また、「吃」を「他動詞」にしたら、①から④まで語の「意味」をぬきにする

と、すべて「NV」という「構造」になるから、どうやって「慣用句」であるかどうかを判断するのであろうか。

中国語の場合、むしろ品詞とは言葉の位置を示すものの、語と語との関係を限定する働きを持っていないというべきである。つまり「NV」とは、すでに理解した意味を説明するための手段に過ぎない。

たとえば「吃父母・吃外面・吃大盤。吹電風扇・冷氣・風。出車禍・事・亂子。打前鋒・打後衛。唱花旦・小生。喝大杯。洗冷水・洗熱水。塞車。罵街。讀小学……」などを「慣用句」として分類されても、他動詞といわれる語と名詞といわれる語との関係は「一致性」がないというのはいなめない事実である。

「洗冷水」の意味がわかったら、「洗熱水・温水」等の意味を理解することができるのもいなめない事実であろう。

どうしても中国語にも品詞があると主張する研究者には、言語事実から、中国語において「一致性」の語関係がやはり普遍的な原則であることを証明してほしい。

同じ「壽」であっても「壽桃」（老人の誕生日祝いにおくるうどん粉で作った桃）『鐘ヶ江信光 中国語辞典 729 ページ 大学書林 一九六〇』

「壽衣」（死者に着せる衣服）『同 729 ページ』における「壽」の意味がまったく違う。

「大便・小便」「便利・方便」などにおける「便」についても同じことが言えよう。

つまり、中国語にでは同じ「語」であっても、違う「語」と結合すると、いずれかの「意味」を基準にして他のすべてを説明することができないということである。「壽桃」の「壽」によって「壽衣」の「壽」を説明することが出来ないし、「小便」の「便」によって「便利」の「便」を理解することもできないわけである。

これをいままで述べてきたような事実を合わせてみると、中国語の語順における語関係と日本語の構造における語関係において、実は違う原理が働いているこ

とがはっきりとわかってもらえるのであろう。但し他言語の「品詞論→構造論」という文法体系の「一致性」に固執することを前提にしているから、中国語の「類推性」が、ずっと無視されてきた。結果として表では中国語にも品詞論があると主張しながら、裏では、自分のかんを働かせて推測しようとする矛盾が生じる。他言語の文法体系へのこだわりは中国語の言語事実を見失う結果を招くだけである。「吃」という語に「他動詞」という性質を送り込まれたから、ふだん使われている「吃外面」「吃公司」「吃父母」などは、文法上、永遠に説明のできない慣用句になってしまうし、また品詞によってはどれが「他動詞」の目的語であるのかもわからない。西洋語の規則がすべての言語の原理である」という結論先行の研究姿勢を捨て、事実を事実として認め、そして「類推性」という語関係の原理を基盤に中国語自身の文法体系を築かなくてはならないのであろう。中国人を相手にする日本語教育や言語教育の見地からみてもそれはもう急がなくてはならない課題である。

参考文献

- ①中国語学研究会編（一九六九） 『中国語学新辞典』 一九六九年光生館
- ②香坂順一（一九七六） 『中国語学の基礎知識』 光生館
- ③呂淑湘（一九七五） 『中国文法要略』 文史哲出版社
- ④大河内康憲（一九七三） 「日中対照文法論—主語及びそれとかかわる問題—
『日本語と日本語教育—文法編—』 文化庁
- ⑤高本漢著・杜其容訳（一九七九） 『中国語之性質及其歴史』 国立編訳館中華叢書編審委員会
- ⑥杉村博文（一九八五） 「吹風考」 『日本語と中国語の対照研究』 第十号
日本語と中国語対照研究会編
- ⑦朱廣興（一九九〇） 「〈品詞による中国文構造分析〉批判」 一大河内康憲先

生に教えを乞うー」『中国研究集刊』総第九号 大阪大学中国学会

⑧朱廣興（一九九一） 「中国語文法論への試み」ー再び大河内康憲先生に教え
を乞うー『中国研究集刊』総第十号 大阪大学中国学会

⑨鐘ヶ江信光（一九六〇） 『中国語辞典』 大学書林